

## 第5節 美園遺跡出土の弥生時代後期末から 古墳時代前期の土器

渡 辺 昌 宏

### 1 はじめに

今回の調査においては、弥生時代後期末から古墳時代前期にかけての土器が多数検出された。これらの資料は包含層からだけでなく、多くは遺構に伴って出土している。C地区遺構出土の一括資料を中心に編年作業を試みた次第である（付図34参照）。

### 2 器種

#### (1) 鉢

A類：外反する口縁を有し、頸部がくびれている。体部は丸味をもって底部へ向っていた。

B類：僅かに摘み出した口縁部をもつが、全体にはカップ状を呈する。

C類：口縁が大きく開く鉢であり、体部は半球形を呈した。底部は平底になるものが多い。

#### (2) 台付鉢

一部高杯と呼べるものも含めており、上部の鉢には鉢A類と類似したものが乗る例もあった。脚台部だけの破片が多く見つかった。透かし孔を持つものも認められた。

#### (3) 杯

鉢A類と類似する特徴をもつが、体部が浅めである。布留式に入ると明確になる器形であり、庄内式の後半から出現する。

#### (4) 甔

器形としては鉢の一種に含まれるものであり、底部に焼成前の穿孔が1個認められる。甔として使用されたと思われるが、その用途に疑問を持つ意見もあり今後検討を必要とする。

#### (5) 大形鉢

鉢の一種であり、鉢の分類に入れた方が良いかもしれないが、ここでは大形鉢として別個に扱う。生駒西麓産の胎土で製作されたものが多く、古い時期にはほとんどが片口であった。鉢A類と類似しているが、全体的に口縁部が短い。

#### (6) 器台

A類：受部は皿状を呈し、端部がやや立ち上がる。脚台部は下方に広がり、受部と脚台部との間は貫通していない。

B類：A類と類似しているが、受部は丸味をもたずに直線的に外反していた。

C類：浅い受部をもち、脚柱部が太めである。脚台部は大きく開くと思われる。

D類：山陰地方に多く見られる所謂鼓形器台である。庄内式のものは包含層から出土しており

（第202図C091）生駒西麓産であった。布留式の場合は、そのメルクマールになる小形精製土器三種<sup>(1)</sup>の一つを形成している。

## (7)高杯

A類：杯部の口縁が大きく外反しており、杯部下方外面に稜が観察される。庄内式の新しい段階になると脚柱部が短くなる傾向を示す。

B類：大形の高杯で、2段に外反する杯部をもつ。杯部の口縁が直線的に強く開き、杯部下半とは明確に分離された。大和地域でも同様のものが出土している。

C類：A類が変化した器形で、杯部下方に丸味をもつ、布留式に認められる高杯である。

D類：杯部が半球形のカップ状を呈する。脚柱部は極めて短く、脚台部は外側にかなり広がっていた。新しくなるに従って、杯部の口縁が立ってやや深めになる。

## (8)手焙形土器

本遺跡からは手焙形土器が多数検出された。器形の変遷及び編年については、本書第Ⅴ章第7節で詳説している。

## (9)製塩土器

脚台Ⅰ<sup>(2)</sup>式になると考えられる、製塩土器の脚台部が1点出土した。

## (10)壺

A類：口縁部が外側に開く小形壺で、小形丸底壺の系譜をもつものである。

B<sub>1</sub>類：口縁がやや外反する直口壺で、比較的大形のものを指す。

B<sub>2</sub>類：器形的にはB<sub>1</sub>類と類似している、小形の壺である。

C類：やや外反する短い口縁部をもつ、比較的小形の壺類を含めた。

D類：口径の大きな短い口縁部をもつ壺で、形態的には甕に類似するもの。

E類：頸部に突帯をもつ大形の壺である。二重口縁になるものが多い。

F<sub>1</sub>類：二重口縁の大形壺形土器を本類として扱った。但しD200は、系譜的には中国地方の影響を受けていると考えられ、本来は別の器種分類に入れた方が良いかもしれない。

F<sub>2</sub>類：二重口縁の小形壺を指す。

G類：直口壺の口縁端部がやや外反して、丸味をもつもの。

## (11)甕

A<sub>1</sub>類：本遺跡を含む、平野部の周辺遺跡で製作されたと思われる大形の甕である。外面には荒い叩き目が施されていた。

A<sub>2</sub>類：A<sub>1</sub>類の比較的小形のものを含めた。

B類：美園遺跡及び周辺の平野部に立地する遺跡で製作されたと思われる甕である。底部に篋削りを施しており、尖底状を呈する。

C類：A・B類同様に地及びその周辺部産の土器である。口径と体部最大径とが、ほぼ同じになる広口の大形甕であった。

D類：生駒西麓産庄内式甕の器形的な影響を受けて成立した。右地産（周辺平野部遺跡を含む）の甕である。その系譜を受け継いで、布留式の甕が出現すると考えられる。

E類：摂津ないし播磨地域の土器と考えられ、胎土も河内平野部のものとは異なっていた。

搬入された土器であろう。体部が球形を呈し、器壁が薄く、細い叩き目が観察される。

F類：布留式甕の一種である。口縁部が強く外反して、体部は球形を呈する。本遺跡においては、布留式に入ると生駒西麓産の胎土をもつ甕がほとんど認められない。

G<sub>1</sub>類：生駒西麓産の比較的大形の甕。<sup>(3)</sup>(所謂庄内式甕によって代表される。)

G<sub>2</sub>類：生駒西麓産の比較的小形の甕。

以上35種類の器種に分類した。

### 3 時期

遺構に伴う一括資料を中心とした土器の型式学的な検討及び遺構の切り合い関係等から、以下で説明する7期に分類した。各時期の特徴を概略的に述べてみたい。

#### (1) I 期

代表的な遺構としては、C S D 302 (C 152～C 154)、C S K 301 (C 184・C 187・C 188・C 190・C 191)がある。甕類について言えば、所謂生駒西麓産庄内式甕(甕G類)の共伴は認められず、在地(周辺平野部に立地する遺跡を含む)の胎土で製作された甕がほとんどであった。器形的には微妙な差異が認められたが、基本的には外面に荒い叩き目を施し、内面は刷毛目ないし篋ナデを加えている。C 154のように底部を削って尖底状にした甕が認められた。

畿内第Ⅴ様式末に相当すると考えられる。

#### (2) II 期

代表的な遺構には、C S K 308 (C 280・C 283)、D S K 306 (D 193・D 195・D 197～D 200・D 203～D 208)、C S D 320下層(C 284)があげられる。特に興味深い点としてはD S K 306出土資料中に中国地方の影響が見受けられた。具体的にはD 200とD 208である。この時期は、地域間交流がより盛んになると考えられる。<sup>(4)</sup>

II期は甕の特徴から2時期に細分することが可能であり、C S K 308出土資料が前半期、D S K 306及びC S D 320下層出土資料が後半期に相当する。前半期の在地産甕(C 283)は、体部が球形化を示すと共に底径が小さくなる。外面の調整は体部下半部と上半部で叩き目の方向が異なり、体部上半には「連続ラセンタタキ技法」<sup>(5)</sup>が観察された。また底部は端まで丁寧に叩きを施し、底面の中央を篋削りによる抉り込みを加えて、小さな凹みを作っている。内面はまだ篋削りが明確ではなく篋ナデないし板ナデ等を施していた。後半期の在地産甕(D 199、C 280)は、全体の成形及び調整が粗雑になる。特に底部外面の調整が前半期と異なっていた。中央部の篋削りによる凹みが小さくなり、最後に底部底面へ叩きを加えている。この叩きのために底部縁辺の粘土がはみ出すような状態を呈し、前半期のような底部のシャープさが失われる。この段階になって初めて、本遺跡では所謂生駒西麓産庄内式甕(甕G類)が伴う。C 284に代表される甕であり、D S K 306からも検出されている。器形の特徴としては口縁に端面を持たない点と、体部最大径が肩部に近い体部上半部に認められることであった。また底部は、僅かに平底状を呈している。調

整の点では、外面に細い叩き目を施し、その上にかなり荒い縦方向の刷毛目を体部上半部から下半部にかけて加えている点が特徴である。体部内面は、全体に良く篋削りが施されており、器壁は、かなり薄かった。

### (3)Ⅲ期

代表的な遺構としてはC S D 319 (C 287、C 289、C 291、C 298、C 299、C 301、C 303、C 305～C 310、C 312～C 314、C 316、C 318)とC S D 320 上層 (C 277～C 279、C 282)がある。C S D 319からこの時期に属する土器がまとまって出土しており、器種のバラエティが豊富であった。前時期と比べて中国地方の影響を受けた土器が減少し、今度は生駒西麓産のものが増加を示す。しかし、鉢A類、器台、高杯類では在地産の土器が多数を占めた。甕類は前時期からの系譜をもつA<sub>1</sub>、A<sub>2</sub>類が激減し、逆にG<sub>1</sub>、G<sub>2</sub>類が増大する。甕G<sub>1</sub>、G<sub>2</sub>類の特徴としては、口縁端部に面をもつものが現われ、体部最大径が上半部から中央部へと徐々に下がってきた。底部は尖底状を呈するものがほとんどである。外面の調整は、体部に細い叩き目を施し、その後体部下半部に細い縦方向の刷毛目を加えるようになる。またC 301のように、生駒西麓産庄内式甕の影響を受けて成立したと考えられる在地産の甕(甕D類)も現われる。この甕は溝から検出された資料であり、共伴性の点で若干問題を残すが、すでにこの時期から存在している可能性が大きい。

### (4)Ⅳ期

B S K 304 (B 1047、B 1048、B 1050、B 1052)とC S K 303 (C 209～C 212、C 217)及びC S D 312 (C 192～C 195、C 199、C 202)からこの時期の一括資料が見つかった。特徴的な器形としては、布留式で顕著になる杯がこの時期から現われるようである。また高杯A類は脚柱部が短くなり、杯部下方外面の屈曲部分に沈線が施されるものがあった。二重口縁壺(壺F<sub>1</sub>類)には、箸墓古墳出土の底部穿孔壺<sup>(6)</sup>と口縁部の形態が類似しているものが認められる(C 192)。甕G<sub>1</sub>、G<sub>2</sub>類の場合は、まずプロポーションが変化を示す。口縁端部が上方に摘み出されており、端面を縁状に巡っていた。体部は中央部及びやや下方に最大径を有するものが増え、全体に球形化してくる。体部外面の調整は細い叩き目を施した後、その上を全体的に細い刷毛目で調整を加えていた。体部の球形化と刷毛目調整の盛行が顕著である。

### (5)Ⅴ期

C S D 313上層 (C 342～C 346)からまとまって検出されている。数量的に少ないため各器種の変遷が充分には捉えられなかったが、大形鉢、壺B<sub>2</sub>類、壺F<sub>2</sub>類、甕G<sub>2</sub>類に顕著な特徴が観察された。Ⅳ期との差異は少なく、あるいは同一の時期として含められるものかもしれない。庄内式と布留式の接点に相当する時期であり、甕G<sub>2</sub>類はⅣ期に比べてかなり布留式の甕に近似していた。

### (6)Ⅵ期

C S D 323 (C 353、C 354、C 357、C 358)、C S D 324 (C 365、C 367、C 368)、C S X 305 (C 347)が代表的な遺構である。時間的な幅をもつ溝から検出された遺物が多く、良好な一括

関係を把握することができなかった。ここでは従来の小若江北式に相当するものを、Ⅱ期として扱う。

最近布留式の成立については、庄内式甕（甕G類）の変化から判断して、若干遡る見解が提示されている<sup>(7)</sup>。またそれとは別に、前方後円墳が成立してから以降の土器を布留式と認定する意見もある<sup>(8)</sup>。前者については、土器のセット関係及び地域的な差異の点で問題が残る。後者については、土器の型式学的な概念とは視点を別にしており、ストレートに受け入れることが難しいと思われる。この問題については、今後継続的な検討を必要とするものであろう。ここでは、小形丸底壺、小形器台、杯の小形精製土器三種の成立をもって布留式と規定したい<sup>(9)</sup>。

#### (7)Ⅱ期

C S D 324 (C 359、C 361、C 363) と C S E 302 の資料を提示した。C S E 302 から検出された土器は、極めて共伴性の強い一括資料である。しかし C S D 324 の方は、Ⅱ期同様時間幅をもって営まれた溝の資料であり、細分が困難であった。ここでは船橋 O-I 式に相当する時期としてまとめた。この時期は古墳時代中期に属するが、布留式の変遷を語る関係から設定している。

#### 4 まとめ

各時期と既存様式との関係は以下のようになると考えられる。

|      |                          |        |
|------|--------------------------|--------|
| I 期  | 北島池下層式 <sup>(10)</sup>   | 畿内第Ⅴ様式 |
| Ⅱ期前半 | 上田町第Ⅰ層式 <sup>(11)</sup>  |        |
| Ⅱ期後半 | 上田町第Ⅱ層式 <sup>(12)</sup>  | 庄内式    |
| Ⅲ期   |                          |        |
| Ⅳ期   |                          |        |
| Ⅴ期   |                          |        |
| Ⅵ期   | 小若江北式 <sup>(13)</sup>    | 布留式    |
| Ⅶ期   | 船橋 O-I 式 <sup>(14)</sup> |        |

各遺跡ごとの一括資料を中心とした資料操作を積み重ねることによって、土器の時期ごとの変遷と各遺跡での様相が明らかになるであろう。それと同時に地域間交流の実体を解明することが重要である。本遺跡の C 地区を中心とした分類と時期区分は、そのための第一歩であり今後とも継続的な研究を必要としている。土器から見た中河内の地域性を解明することが、我々に課せられた仕事でもある。本節の執筆にあたっては、小野久隆、岡本敏行、野藤和也の諸氏より御教示を受けた。記して感謝したい。

註(1) 小形丸底壺、小形器台、杯を指す。

(2) 広瀬和雄「小島東遺跡」「岬町遺跡群発掘調査概要」大阪府教育委員会 1978年。

(3) 田中 琢「布留式以前」『考古学研究第12巻第2号』考古学研究会 1965年。

(4) 美園遺跡周辺部の遺跡においても、この時期頃に中国地方や東海地方の影響を受けた土器が多く確

認されている。例えば八尾市中田遺跡（米田敏幸氏の御教示による。）や久宝寺遺跡（一ノ瀬和夫氏の御教示による。）である。また本遺跡の場合は、手焙形土器に近江地域の影響が強く現われている（本書第Ⅴ章第7節参照）。

- (5) 都出比呂志「古墳出現前夜の集団関係」『考古学研究第20巻第4号』考古学研究会 1974年。
- (6) 中村一郎・笠野毅「大市墓の出土品」『書陵部紀要第27号』 1976年。
- (7) 小山田宏一「布留式成立に関する覚書」『考古学と古代史』同志社大学考古学シリーズ刊行会 1982年。
- (8) 註(5)文献参照。
- (9) 小若江北式から布留式として認定したい。註(5)文献参照。
- (10) 久貝健他「北島池遺跡」『河内古代遺跡の研究』大阪府立花園高校地歴部 1970年。
- (11) 原口正三「大阪府松原市上田町遺跡の調査」『大阪府立鳴上高等学校研究紀要復刊第三号』 1968年。
- (12) 註(11)文献参照。
- (13) 坪井清足『岡山県笠岡市高島遺跡調査報告』岡山県高島遺跡調査委員会 1956年。
- (14) 原口正三・田辺昭三『河内船橋出土遺物の研究(2)』大阪府教育委員会 1962年。